

羽村市史編さんだより

平成28年10月

第7号

# 伸びゆくはむら

特集

段丘のある暮らし

2

- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとんべえ」



## 第5回羽村市史編さん委員会を開催

9月30日（金）、市役所で第5回羽村市史編さん委員会が開かれました。会議では、平成28年度上半期の事業の実績や平成28年度下半期の事業計画について報告があり、順調に進んでいることが確認されました。また、平成29年度から刊行予定の資料編について、各委員から意見を伺いました。詳しくは次号でお知らせいたします。

なお、第1期の編さん委員はこの日をもって任期が終了しましたが、各委員とも再任されて、第2期がスタートしました。



▲第5回羽村市史編さん委員会の様子

## 第2回羽村市史関連講座を行います

### 山と川と坂と

～羽村市とその周辺の大地の営み～

講師 白井正明さん

羽村市史編さん部会第4部会長

首都大学東京 地理学教室准教授

羽村市史編さん第4部会長として市内外で調査を続ける講師が、羽村周辺の身近な大地に刻まれた物語をひもとき、語ります。見慣れたまちの風景が違って見えてくるかもしれません！

日時 11月26日（土）午後2時～4時

会場 生涯学習センターゆとろぎ 講座室1

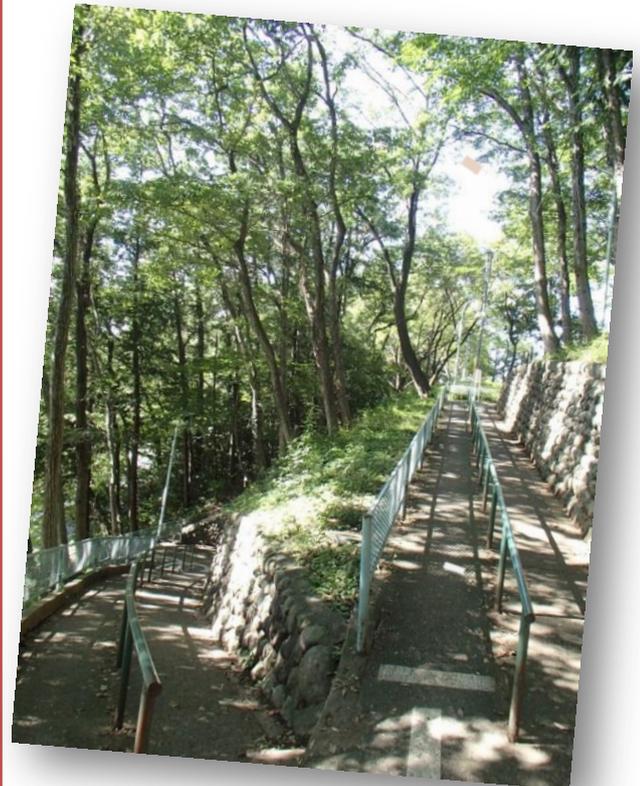
定員 80人

参加費 無料

※直接会場へお越しください

※保育あります

※詳しくは、広報はむら11月1日号をご覧ください



▲小作緑地の坂道



### 表紙の写真 市内遠望【羽村神社(草花丘陵)から撮影】

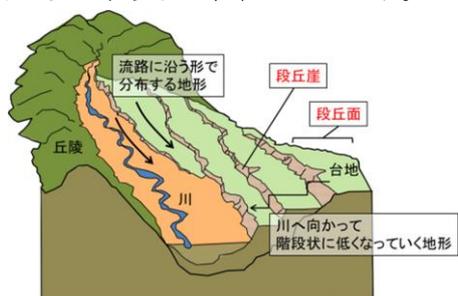
羽村市郷土博物館裏手から草花丘陵を浅間山めざして登って行くと、「羽村神社」（標高約220m）がひっそりと佇んでいます。ここは、まちを一望できる絶好のポイント。

台風通過後の水量豊かな多摩川に、空や木々がくっきりと映し出されています。その先には、崖線に沿って緑地の連なりが幾筋かあるのも見られます。

## ●段丘と坂

羽村で生活していると、どこへ出かけるにも必ずといっていいほど通過する坂道。駅へ向かう時に、通学路に、または多摩川へ遊びに行く時に…。この普段なにげなく上り下りしている坂道は、昔の多摩川が台地を削った痕跡です。

昔の多摩川は、氾濫するたびに土砂を押し流し、浸食と堆積を繰り返して武蔵野台地の扇状地を形成しました。山地から流れ出した多摩川は、狭山丘陵の南北を削り、氾濫をくり返しながら少しずつ流れを南に変え、現在の位置に至ります。



参考資料：ウェブ百科事典「コトバンク」

徐々に低い方へ流れた多摩川が削った跡が、坂として私たちの生活に密着することになりました。市内には多くの坂があり、土地は多摩川へ向かって階段状に低くなっています。車両もなく道路整備も進んでいなかった頃、坂の上の畑へ農作業に出かける際の往来とその苦労は今では想像しかできません。この地形を川がつくった河成段丘とよび、平坦な面を段丘面、その間の坂や崖を段丘崖とよびます。

## ●段丘と緑地

段丘崖には緑地が残っています。斜面に残る緑地を崖線緑地とよび、このような緑地は流路に沿う形で帯状に残っています。



▲斜面に残る緑地

羽村では羽村神社（草花丘陵）から市街地を眺めると、緑が生い茂る時期には崖線緑地は緑色で彩られ、その位置が一目瞭然です。この緑地を構成する主な樹木は、コナラ、クヌギなどの落葉広葉樹、アカマツ、スギ、ヒノキなどの針葉樹です。緑地には樹高は20m、幹の太さは直径30cmを超える個体も生育しています。

## ●段丘とその環境

このような緑地は生物観察にはとっておきの環境です。野鳥はもちろん、昆虫、季節の野草まで、さまざまな生物の宝庫です。昆虫採集をするのもよし、見たことのない野草をカメラにおさめるのもよし、図鑑を片手に、子どもは自然とふれあい、大人は童心に帰る…。緑地は私達にそんな豊かなひとときを提供してくれます。

真夏の高温の日でも、緑地内に入るとひんやりとして歩きやすい、なんてことは経験している人も多いことと思います。アスファルトに覆われた道路から一歩踏み込めば、体感温度は明らかに異なります。秋には紅葉する木々が夕日に映えます。季節を感じられる環境が身近なところに残されています。



▲紅葉する小作緑地

## ●市史編さんの調査

以上のように、自然に着目してみても、羽村には見どころがたくさんあります。すぐ身近にある自然がどのような状況になっているのか、これらを知ることで羽村の魅力の再発見へとつながるのではないのでしょうか。

市史編さん事業では、市内の自然に関する調査を行っていき、自然あふれる羽村の魅力をみなさまにお伝えしていきます。

# 部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。

## 用語の解説

おそき  
小曾木村…現在の青梅市小曾木地区周辺にあった村で、昭和30年(1955年)に青梅市に編入された。

通過儀礼…出生・成人・結婚・死など、人生の重要な節目を通過する際に行われる儀式・風習。

## 第1部会 ～原始・古代・中世～

縄文班では、引き続き市内遺跡出土遺物の再整理作業を行っています。土器の接合状況を中心に各データと照合して、なるべく細かな時間設定を行い、縄文時代の羽村人の生活の様子を明らかにしようと試みています。

中世班の資料調査は佳境を迎え、未調査だった市内の石造供養塔調査に加え、奥多摩町山間部や青梅市内神社の資料などを調査しました。

また、資料に書かれた文字を読み改めてパソコンに入力する作業も進めています。

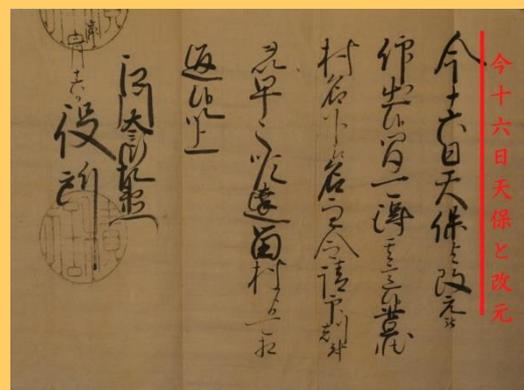


▲市内の石造供養塔の現存状況

## 第2部会 ～近世～

第2部会では、市内に残されている古文書の調査を継続して行っています。

現在の様な情報伝達技術がない江戸時代において情報伝達のスピードはどの程度だったのでしょうか。写真は領主から各村へ改元したことを通知した史料です。「天保」という元号に改元されたのは12月10日でしたが、実際に村々へ宛てた書類では12月16日になっています。情報を領主が知り、それを通知するまでには多少の時間差があったことがわかります。



▲江戸時代の古文書に残された改元の通知



## 第3部会 ～近代・現代～

資料編「近現代写真図録編（仮）」の刊行に向けて、市の刊行物に掲載された写真・郷土博物館所蔵の写真・市民の皆様が所蔵している写真の整理を行っています。さらに「近現代資料編（仮）」の刊行も控えているので、引き続き資料の閲覧・情報整理を行っています。資料調査では明治・大正・昭和期に西多摩村と共に西多摩郡に所属していた小曾木村の行政文書も併せて閲覧しながら、近現代の羽村についての調査を進めています。



▲第3部会打合せの様子



## 第4部会 ～自然～

生態班で行っている樹木の年輪調査では、枯死し伐採された市内のアカマツの切り株を観察しています。これまで観察したマツの樹齢は70～100年ほどであることがわかっています。

地形・地質班は昨年までの比高調査の結果をもとに、離れた段丘面の関係を推定しました。羽村の地形について、多摩川がどのように削ってきたのか検討していきます。

気候班は夏の気象観測を行いました。33℃近い気温を観測したのは夏まつり開始時刻でした。



▲アカマツの切り株

（左側のカメラケース：タテ12cm）



## 第5部会 ～民俗～

第5部会では、人々の生活の様子や暮らしぶりなどについて、「生業」「信仰」「通過儀礼」「社会組織」「景観」「建物」などの分野に細分して、その実態や移り変わりなどを調査しています。

今夏は、昨年8月と2月に実施した合同聞き取り調査の内容を整理し、改めて個別に聞き取り調査を実施しました。ご協力いただいた方々には大変ありがとうございました。市内での地域性やほかの地域との比較などをしながら、羽村市の特徴を明らかにしていきます。



▲聞き取り調査の様子

（写真は平成28年2月の聞き取り調査）

# 市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
7月	5日(火)	② 市内史料調査(五ノ神) ※以後定期的に実施
	12日(火)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	15日(金)	羽村市史編さんだより 第6号発行
	25日(月)	② 市外史料調査(東京都公文書館)
	27日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	28日(木)	① 市内石造供養塔調査 ④ 聞き取り調査(個人宅)
	31日(日)	④ 気温の移動観測・風向風速の観測
8月	4日(木)	② 市外史料調査(東京都公文書館)
	9日(火)	⑤ 市内合宿調査
	10日(水)	⑤ 市内合宿調査

月	日	できごと
8月	16日(火)	① 中世史料調査(奥多摩町) ④ 市内礫層調査
	17日(水)	① 中世史料調査(青梅市)
	24日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	31日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
9月	1日(木)	④ 市内礫層調査
	15日(木)	② 市内史料調査(川崎) ③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	23日(金)	④ 気温観測データ(定点)の回収
	28日(水)	③ 市外史料調査(一橋大学図書館)
	30日(金)	第5回羽村市史編さん委員会

## コラム **ちっとなべえ**

### 第7回 拓本作業の難しさ “大胆かつ繊細に”

石造物などに刻まれている文字を確認する方法として一般的な拓本。原理は簡単なのですが、やると見るとでは大違い。さっそく始めてみましょう。

表面に乾いた紙を張り付け、霧吹きなどを使って水で湿しながら密着させていきます。表面の凸凹に合わせてうまくやらないと、文字が浮かび上がりません。かといって焦ると水に濡れた紙が破れます。

大きな石碑はいくつかに分割します。1枚目が成功しても2枚目が失敗するなんてことはよくあることです。また、紙が風にあおられてうまく密着してくれないこともあります。

今度はせっかく濡らした紙を乾かします。そうしないと後で墨がきれいに乗らないのです。気が短いと乾く前に墨を打ち始めて、結局失敗することになります。

良く乾いた後、タンポで墨を打ちます。石に刻まれた文字に食い込んでいる部分は白いまま残るので、文字が判読できるのです。

最初から濃く打つと修正がきかないので、薄く薄く全体のバランスを考えながら打っていきませんが、どうしても濃淡ができてしまいます。修行不足を嘆きます。

最後に、紙を石からはがしますが、表面の凸凹に食い込んで乾いているので、無理やりはがすと破れてしまいます。

「大胆かつ繊細に」がキーワードの拓本作業です。(M.M 記)



▲板碑の拓本作業風景

※「ちっとなべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。